

目次

第一章	ケネディ大統領はアボリジニに出会ったか	1
	—— 幻のブック・ラウンチ会場より ——	
1	フィールドワークのオーラル・ヒストリー	3
2	グリーンジ・カントリー	6
3	誰が歴史家なのか？	12
4	僕たちの歴史実践	20
5	ジミー・マンガヤリとの出会い	36
6	もうひとつの経験主義	43
第二章	歴史をメンテナンズする	51
	—— 歴史する身体と場所 ——	
1	歴史実践とは何か	53

2	歴史する身体と世界の歴史……………	58
	(1) 注意深くある身体／(2) 歴史する身体／(3) 世界のありよう／(4) ド リーミング①——世界の起源について／(5) ドリーミング②——世 界の維持について	
3	移動の知識学……………	75
	(1) 移動生活民とは／(2) 家(house)と我が家(home)について／(3) ドリーミング③——空間移動の倫理学／(4) 繋がりの網目について ／(5) 開かれて可変的な知識体系	
4	グリーンジ社会の時間性……………	91
5	グリーンジ・カントリーの歴史実践……………	95
第三章	キャプテン・クックについて……………	101
	——ホブルス・ダナイヤリの植民地史分析——	
第四章	植民地主義の場所的倫理学……………	117
	——ジミー・マンガヤリの植民地史分析——	
1	時間と空間、歴史と場所……………	119

2 場所の倫理学……………123

3 「正しい道を歩みなさい」……………126

4 正しい道を「歩む」……………132

5 キャプテン・クックはどの方角から来たか……………138

6 倫理の世界地図……………145

7 場所を志向する歴史……………149

8 グリンジ・カントリーにおける方角の意義……………151

9 白人カリヤの法は、どこに由来するのか……………154

第五章 ジャツキー・バンダマラ……………161

——白人の起源を検討する——

1 オーストラリアにやってきた最初のイギリス人……………164

2 ジャツキー・バンダマラは「猿」から進化した……………169

3 ジャツキー・バンダマラの植民地主義……………175

4	ジャッキー・バンダマラの生き方	178
5	すべての悪い思想はジャッキー・バンダマラに由来する	182
6	多元的な歴史時空へ……そして共有の可能性は？	184
7	白人は猿から、アボリジニはドリーミングから	186
8	北部海岸からの伝承	188
9	ヨーロッパ人の形成	192
10	方法としてのドリーミング	196
第六章	ミノのオーラル・ヒストリー	211
	——ピーター・リード著『幽霊の大地』より——	
第七章	歴史の限界とその向こう側の歴史	229
	——歴史の再魔術化へ——	
1	歴史の相対性について	232
2	グリーンジが語る歴史物語り	236

3	「地方化された歴史」について	242
4	ポスト世俗的な歴史叙述	244
5	クロス・カルチュラライジング・ヒストリー	251
6	歴史経験への真摯さ	257
第八章 賛否両論・喧々諤々		
——絶賛から出版拒否まで——		
1	草稿もってグリーンジ・カントリー再訪、二〇〇〇年七月	273
2	博士論文の査読報告(抄訳)、二〇〇一年六月	279
	(1)査読者1 / (2)査読者2 / (3)査読者3	
3	『シドニー・モーニング・ヘラルド』紙より、二〇〇一年一二月	287
4	某出版社からの査読報告(抄訳)、二〇〇二年某月	292
	(1)専門家A / (2)専門家B	
5	〇〇書店K氏からの電子メール(日本語)、二〇〇三年四月	300



司会：

みなさま、本日は保苺実さんの処女作、『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（御茶の水書房、二〇〇四年）の出版記念パーティーにお集まりいただき、誠にありがとうございます。本日は、本書が世に問うオーラル・ヒストリーの方法について、氏みずから熱く語っていただきたいと思います。それではさっそく保苺さん、よろしく願います。

## 第一章 ケネディ大統領はアボリジニに出会ったか<sup>(1)</sup>

——幻のブック・ラウンチ会場より——





## 1 フィールドワークのオーラル・ヒストリー

ども、はじめまして、ほかりみのると申します。この本を手にとつてくださって、ありがとうございます。買ってくれた人には、さらに、ありがとうございます。本書は、(翻訳書を除けば)僕が執筆するはじめての本です。というわけで、けっこう緊張もしているわけですが、ともかく本書がみなさんの目にとまったこと、まずはとてもうれしく感じています。どうぞ、よろしくおつきあいください。

僕は、オーストラリアの大学で歴史学の博士号を取ってきたんですけれども、研究課題は、オーストラリアの先住民民族アボリジニの歴史にオーラル・ヒストリーの手法で接近する、というものでした。ポール・トンブソンの『記憶から歴史へ』<sup>(2)</sup>が邦訳されたりして、イギリスや米国のオーラル・ヒストリーの研究状況が日本に紹介されるようになりましたけど、オーストラリアの場合、特にアボリジニの人々は文書を残してきませんでしたので、必然的に、オーラル・ヒストリー研究は全然違和感なく定着しています。とはいえ、その方法について言えば、僕はオーストラリアの(たぶん、それ以外の地域でも)研究状況に決して満足していません。僕はその辺の話をしたと思います。ただその前に、これ後で重要になってくるんで、一言言っておきたいんですけれども、僕は歴史学者です。「お前は人類学

者だ」とよく言われるし、僕の研究方法はたしかに人類学から多大な影響を受けてきました。とはいえ、僕自身は歴史学にこだわりをもって研究をしています。ときどき半ば冗談半ば本気で、自分のことを「戦略的歴史学者(a strategic historian)」と呼んでいます。その意図するところは追々あきらかになっていくと思いますが。

アボリジニのオーラル・ヒストリーに耳を傾けることをきっかけにして、「歴史」を生産・維持しているのは、なにも歴史学者だけではないということ、むしろ僕たち誰もが、ふだんから行っているはずの歴史実践(Historical Practice)に注目し、それを大事にしていこう、というのが本書の大雑把な目標です。ここでは、僕自身が、博士課程での研究をつうじてオーラル・ヒストリーの方法について考えてきたことを簡単にまとめることで、本書全体の見通しを示したいと思います。

僕は、オーラル・ヒストリー研究には大きく三つの方法があると思っています。ひとつは今オーラル・アーカイブを作ろうという話が日本でも出てるようで、素晴らしいことだと思うんですが、そういったすでに保存されているテープや文書、つまり口述記録に研究者がアクセスして、それを史資料として歴史研究を行う方法です。フィールドワークを行わない人類学者は「アームチェアー・アンソロポロジスト(肘掛椅子人類学者)」と呼ばれて揶揄されますが、これにならって自分では聞き取り調査を行わないオーラル・ヒストリー研究者をアームチェアー・オーラル・ヒストリアンと呼んでもいいかもしれません。とはいえ、現在では手に入らない昔の口述記録にアクセスすることは、オーラル・ヒストリーの重要な研究手法

のひとつであることは間違いないさそうです。次に、二番目の方法は、これがオーストラリアで一番盛んだし、世界的にも多いと思うんですけども、インタビュー形式のオーラル・ヒストリー研究です。歴史家が、自分で人に会って、そこでノートを書き取るなり、テープを録るなり、ビデオを撮るなりして、オーラル・ヒストリーを記録し、さらにその資料を自分で分析してゆく方法ですね。このもつともオーソドックスな方法については、『記憶から歴史へ』でも詳しく論じられていますし、今後もインタビュー形式のオーラル・ヒストリーの方法論めいた本がたくさん出版されそうな気がするのですが、本書ではとくに扱いません。<sup>(3)</sup>

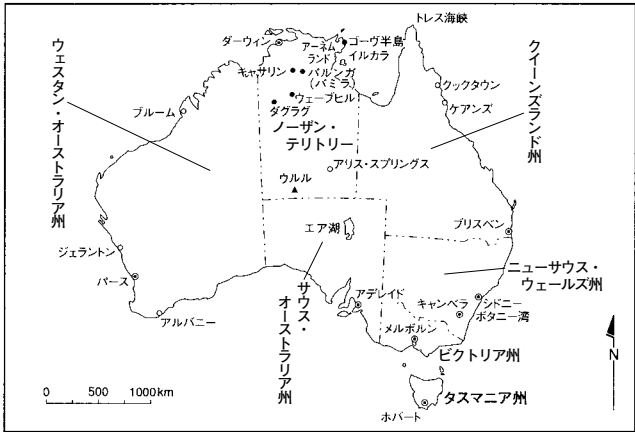
さて、僕自身がこだわってやってきたのは、この二つのどちらとも違う、三番目の方法です。どういう方法かというと、僕はほとんどインタビューしないんですよ。インタビューをしないというと、ちよつと語弊があるんですけども、もちろんテープをまわす時もあるんですが、ある時間を決めて、その時間のあいだに、準備した質問に答えてもらうということになるべくしないで、むしろアポリジニの人々が暮らす村(コミュニティ)に滞在させていたでいて、一緒に生活していく中でかれらが具体的に行っている歴史実践と一緒に経験していく。つまり、コミュニティに暮らす人々と一緒になって「歴史する(doin'g history)」ことを心がけました。そんななかで、もちろん、「もうちよつとその話、くわしく聞かせてよ」といってテープをまわすことはあります。ただ、アポイントをとって、インタビュー室みたいな場所で、つまり人工的に作り出した時間なかで過去を語ってもらうことはせず、むしろかれらの生活のなかで生きている歴史実践にそくして歴史と一緒に体験してゆくという方

法を重視しました。それを僕は、フィールドワーク形式と呼んでいます。

具体的には、僕はたぶん人類学者の方々のフィールドワークとほとんど同じことをやっていますね。つまり許可をもらってコミュニティに入って、言葉を学んで、人々と生活をともにする。あんまり好きな言葉ではないですが、要するに参与観察です(僕には、どうやったら参与と観察を同時に行えるのかわかりません。コミュニティに暮らしている間、僕は観察しているときには参与できず、参与しているときには観察できませんでした。だまし絵の二つの図像を同時に見ることができないように、参与と観察も同時には不可能です、たぶん。さらにもうひとつ、参与観察という言葉には、自分もまた観察され試されているんだという現地の人々の立場からの状況把握が完全に欠如しているのも気になります)。僕のぼあい、一九九七年から二〇〇二年にかけて、ダグラグ(とカルカリング)というアボリジニ・コミュニティに延べ約一年、オーストラリア北部・中央部でうろうろしていた期間全部あわせると、たぶん二年間弱くらいになると思いますけれども、人類学者のフィールドワークとほぼ同じことをやりつつも、しかし歴史(学)にこだわったオーラル・ヒストリー調査をしました。

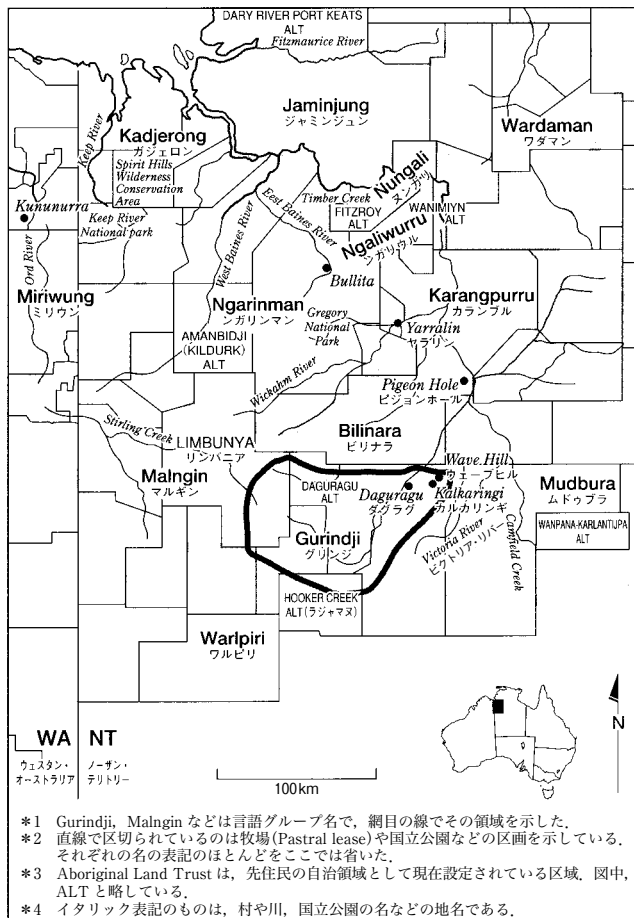
## 2 グリンジ・カントリー

グリンジの人々、そしてダグラグ村について、若干説明しないといけませんね。ダグラグ村は、ノーザン・テリトリーと呼ばれる準州の北西部に位置しています。オーストラリアの



地図 I-1 オーストラリア全図

アボリジニ諸社会は、細かく分けると約六〇〇の異なる言語グループによって区別されます。「グリーンジ」は、こうした言語グループのひとつです。グリーンジの人々をはじめとするそれぞれの言語グループには、経済的、社会的、霊的に自分たちと結びついた土地があります。これは一般に「カントリー」と呼ばれています。ダグラグ村は、グリーンジのカントリーに位置しています。グリーンジ・カントリーには、カルカリンギとダグラグの二つの村があり、両者は一〇キロメートルほどしか離れていませんので、住人はしょっちゅう両方の村を行ったり来たりしています。現在この二つの村はダグラグ・コミュニティ・ガバメント・カウンシルによる自治が行われています。住民のほとんどはグリーンジの人々です。もちろん、グリーンジと姻戚関係にある周辺地域の人々



- \*1 Gurindji, Malnginなどは言語グループ名で、網目の線でその領域を示した。
- \*2 直線で区切られているのは牧場 (Pastoral lease) や国立公園などの区画を示している。それぞれの名の表記のほとんどをここでは省いた。
- \*3 Aboriginal Land Trust は、先住民の自治領域として現在設定されている区域、図中、ALT と略している。
- \*4 イタリック表記のものは、村や川、国立公園の名などの地名である。

地図 1-2 グリンジ・カントリーの位置および周辺

もたくさん暮らしています。ただ、ダグラグ(とカルカリンギ)に暮らす人々はみな、自分たちがグリーンジ・カントリーに暮らしていることを知っていますので、厳密にグリーンジではない人も、日常的にはグリーンジの人々と呼ばれています。

グリーンジ・カントリーは、ビクトリア・リバーという河川の最上流域に位置しています。グリーンジより南にはワルピリと呼ばれる砂漠の民が暮らしています。ビクトリア・リバーの最下流である河口には海の民が暮らしています。グリーンジは河川の民です。グリーンジのカントリーは、北方のビクトリア・リバー中・下流域ほど土地の起伏が激しくなく、しかし南方の砂漠地帯ほど平板でもありません。そこかしこに小高い丘があり、あとは河川の周囲に常緑の樹木が生い茂り、それ以外の地勢はほとんどがだだっ広い平原、といったイメージでしょうか。気候は大きく雨季と乾季に分かれています。カレンダーにそくして説明すれば、雨季はだいたい一〇月から三月くらい、乾季は四月から九月くらいです。とはいえ、年によつてずいぶん変化があるし、ダグラグ村ではそもそもカレンダーなどあまり使われていないので、むしろ「雨が降り始めたら雨季、大地が乾き始めたら乾季」と考えた方が、住民の季節感に近いように思います。雨季には大量の雨が降り、河川が氾濫し、道路があちこちで寸断されます。二〇〇一年にはダグラグ村が水没しかけ、四五〇キロメートルほど離れた町キヤサリンまで全住民が避難しました。一方、乾季にはビクトリア・リバーの支流の多くが干上がって寸断され、湖沼になります。雨季にはどこを見渡しても緑色をしていたカントリーも、乾季がすすむと草木が枯れてすっかり茶色になり、わずかに河川の周辺に木々が緑色に生い

茂るだけになります。

「文献」によつて確認できるグリーンジ社会の背景を簡単に整理しておきましょう。他のすべてのアボリジニ社会と同様、グリーンジも狩猟採集活動をおこなう移動生活民でした。オーストラリア大陸に人間が住みはじめたのは、四く五万年以上前からのようですが、ビクトリア・リバー流域にいつごろ人が住みはじめ、その人々が現在のグリーンジの人々とのような関係にあるのか、などは知るよしもありません。いずれにせよ、いわゆるグリーンジ・カントリーの近代史Ⅱ植民地化がはじまるのは、一九世紀後半以降です。ご存知のとおり、オーストラリア大陸は、一八世紀後半以降イギリスの植民地となるのですが、グリーンジ・カントリーをはじめとする北部オーストラリアは、牧場開発の対象となることが多かつたようです。北東のクイーンズランドや南部のサウス・オーストラリアから牧牛のための土地開発はどんどん拡大していきました。グリーンジ・カントリーに最初の牧場が設立されるのは、一八八〇年代です。ウェーブヒル牧場と名づけられたその牧場は、二〇世紀初頭にイギリスの大畜産資本家であるベステイーズによつて買収されると急速に発展し、一九三〇年代には二万五〇〇〇平方キロメートルを超える牧場面積と五万頭の牛数を誇りました。白人の牧場経営者たちは、牧場設立時には先住民アボリジニを殺害したり追放したりしましたが、その後は、むしろ牛肉や小麦や紅茶を誘い水にして牧場に呼び寄せ、低コストな労働者として搾取の対象にします。グリーンジをはじめとする北部オーストラリアにカントリーをもつ多くのアボリジニ社会は、こうして劣悪な労働条件下で、牧場の労働力として生活するようになりました。<sup>(4)</sup>